

受付番号

11-007

留学・研究計画書

氏名	渡邊 温子	留学機関名	青海民族大学蔵学院
留学先国名	中華人民共和国	留学期間	西暦 2012年9月～2014年8月
研究テーマ	チベットにおける仏教文学の研究と保存—11世紀の聖者ミラレーパを中心に—		
研究テーマの説明	(テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)		
<p>聖者ミラレーパは11世紀のチベットで活躍した仏教の行者である。彼はチベットを遊行し、自身の仏教理解を多くの詩に詠んだ。ミラレーパは現在のチベットにおける仏教の宗派区分でいくとカギユ派に属するが、宗派の垣根を超えて、今なお人々に広く親しまれ、強い信仰を集めている。しかしながら、彼自身は文章を書き残してはおらず、ミラレーパの伝記と彼が詠んだとされる詩はどれも彼の直弟子や、彼の教えを汲む弟子たちによって文字に起されたものである。その中でも、現在のチベットにおいて一般的に親しまれているミラレーパの伝記と詩は、ミラレーパの死後4世紀ほど後になって、ツァンニョン・ヘルカによって編纂された作品である。そして、このツァンニョンの作品をして、ミラレーパ伝の伝統は絶頂に達し、これ以後、新たなミラレーパ伝が編纂されることはなかった。</p> <p>ミラレーパはチベットにおいて、その名を知らぬ人はいないほど有名な聖者である。しかしその研究は近年徐々に進んできてはいるものの、まだまだ未開拓の状態である。また、これまでの多くの研究が、ミラレーパ伝の編纂過程に焦点を合わせたものが多く、その内容についての研究は、まだまだ不十分であるように思われる。そのため、申請者は、まずはツァンニョンの作品の内容の研究に取り組むことを目下の課題とする。チベットの文化は、それ以前の文化を否定し乗り越えるというのではなく、以前のものを自身の内に取り込み、増殖をくりかえして膨張していく文化である。そのため、数多く編纂されたミラレーパ伝の集大成であるツァンニョンの作品に焦点を合わせて研究することは意味があるように思われる。そしてそのように一つの作品を入念に研究することによって、後に他の作品との比較研究をするための土台を築くことができると思われる。</p> <p>チベット本土では数カ所の寺院で毎年ミラレーパの伝記のエピソードにもとづいた仮面舞踊が行われてきた。しかしながら、近年僧侶の数が減少したため、この仮面舞踊の存続が危ぶまれている。実際、チベットの正月に合わせて行われるはずであった青海省チエンツァ県のラモデチエン寺院の仮面舞踊が、2011年には僧侶の減少を理由に中止され、次の正月に再開するかどうかの目処がたっていない。このような状況を受け、ミラレーパの研究者として、仮面舞踊の映像と僧侶たちの証言を収集することは、チベットの文化を保存し守る手助けになると思われる。</p> <p>現在チベットは中国との政治的な関係の中で文化の危機に直面している。近年チベット本土において教育の改革がなされ、学校教育ではチベット語ではなく漢語で授業が行われるという自体が起こっている。その結果、チベット語に不自由なチベット人が増加している。また、チベット本土のみならず、インドに亡命しているチベット社会においても、英語教育が重要視され、母語であるはずのチベット語が疎かにされてきた。そのような現状の中、チベット独自の文化をいかに守っていくかが目下の課題となっている。このような状況下で実際にチベットに入ってチベットの文学作品を研究することは長い視点でも、チベット文化という世界的に見ても価値ある文化を保存することに大きく貢献するものと思われる。</p>			

成果報告書

記入日 2014年 3月 15日

氏名 渡邊温子	留学先国名 中国	所属機関 大谷大学大学院博士後期課程
研究テーマ：チベットにおける仏教文学の研究と保存—11世紀の聖者ミラレーパを中心に—		
留学期間： 2012年 3月～ 2014年 2月		
<p>2年間の中国青海省への留学の間に、チベット人の焼身による中国政府への抗議や日中関係の悪化など、いろいろな出来事が起こったが、無事に留学を終えることが出来た。このような希有な機会を与えていただきましたことを、まずは松下幸之助記念財団に感謝申し上げたい。</p> <p>成果</p> <p>① 大学</p> <p>留学中は青海民族大学において、他の留学生と一緒に中国語を学びつつ、チベットの聖者ミラレーパ研究の第一人者であるクンガ・ワンチュク教授から『ミラレーパの十万歌』について指導をしていただいた。当初の予定では中国語ではなく、青海省で話されているチベット語のアムド方言を学ぶ予定だったが、アムド方言の中にも更に細かな方言の差異があることと中国語が現地調査に入る際に必要であること、また自身がチベット語のラサ方言はすでに習得しているということを鑑みて、中国語の習得に励んだ。</p> <p>テキストの研究としては、クンガ・ワンチュク教授から多くの有意義なアドバイスをいただいた。『ミラレーパの十万歌』の翻訳研究も、教授が多忙な中で時間を取っていただき、共同で進めることが出来た。これらについては、順次論文などで発表していく予定である。</p> <p>② 現地調査</p> <p>1. ミラレーパの仮面舞踊について</p> <p>チベットのアムド地方では『ミラレーパの十万歌』の狩人ゴンポ・ドジェの話をもとにした仮面舞踊が行われている。11世紀にミラレーパが活躍した地域は、おもに西チベットとネパール付近だったが、興味深いことにこれらの仮面舞踊はそれらの地域から遠く離れたチベットの東北に位置するアムド地域で行われていた。また、ミラレーパは現代のチベット仏教の区分でいくとカギュー派の祖師にあたる人物だが、この仮面舞踊はカギュー派ではなくダライラマの属するゲルク派で行われていた。留学中に、いくつかの仮面舞踊を実際に調査し、映像としてデータを採集した。</p>		

A. ラジャ寺院

ゴロク地域に位置するラジャ寺院では3年に一度、チベット暦2月17日にミラレーパの仮面舞踊を行っている。幸運なことに今回は2013年の3月23日に行われたため、調査を行うことができた。仮面舞踊当日は、近隣から遊牧民を初めとする多くのチベット人が集まっていた。テキストとは違い、ミラレーパと狩人はダブルキャストで演じられていた。おそらく、観客に対する音響効果を狙ったものと思われる。

B. ラプラン寺院

こちらは毎年チベット暦7月8日に行われている。ここではミラレーパと狩人だけではなく、全ての登場人物がダブルキャストで演じられていた。ミラレーパの仮面舞踊は、この寺院から始まったと考えられる。

C. ウェンド寺院

この寺院では陰暦1月16日に仮面舞踊を行っていた。他の仮面舞踊や観音菩薩の御輿といった宗教行事もその数日間に行われる。狩人以外は一人の僧侶が演じていた。

これ以外にも、いくつかの寺院で行われていることがわかったが、時間の関係で全てを調査することは出来なかった。いくつかの寺院では僧侶の減少などで、すでに行われなくなってしまっていた。

2. カギュー派寺院の調査

2013年の冬休みを利用して、カム地方（中国青海省と四川省にまたがる地域）のカギュー派の寺院の調査を行った。カギュー派はミラレーパを師と仰ぐチベット仏教の宗派であるため、ミラレーパの仮面舞踊が行われているものと予測していたが、少なくとも自身が聞き取りを行ったキグド（玉樹）やデルゲ付近の寺院では行われていないことがわかった。しかし、ミラレーパの命日とされるチベット暦1月14日にミラレーパの歌った金剛歌を僧侶が歌いながら僧院の回りを練り歩く宗教行事が行われることがわかった。残念なことに、キグドは2010年に起こった地震からの復興の途中で、2013年の時点では、いつ行事が再会されるか見通しの立っていない状態であった。

③ 学会発表および論文発表

以上の研究成果をふまえて、日本、中国、モンゴルで学会発表をおこない、論文を発表した。

国際学会における発表

1. 「Mi la ras pa' s Buddhist Philosophy as seen through the teaching to sGam po pa」 The 5th Beijing International Seminar on Tibetan Studies, At China Tibetology Research Center. 2012年7月29日。
2. 「Mi la ras pa' s Influence-The Episode of Khyi ra ba mGon po rdo rje」 The 13th Seminar of IATS. At National University of Mongolia. 2013年7月25日。

国内学会における発表

1. 「カギュー派の源流：マルパからミラレーパへ」日本印度学仏教学会第63回大会、於鶴見大学、2012年6月30日

2. 「二つの sNyan brgyud について：レーチュンからミラレーパ、ミラレーパからゲンゾンへ」日本印度学仏教学会第 64 回大会、於 島根県民会館、2013 年 9 月 1 日。

論文

1. 「カギュー派の源流：マルパからミラレーパへ」『印度学仏教学会研究』、日本印度学仏教学会、第 61 巻 1 号、pp. 449-446、2013 年。

2. 「二つの sNyan brgyud について：レーチュンからミラレーパ、ミラレーパからゲンゾンへ」『印度学仏教学会研究』、日本印度学仏教学会、第 62 巻 2 号、2014 年。【掲載予定】

留学全体についての感想

留学を開始した当初は、言葉が分からなかったこともあり、とても苦労をした。何をするにしても一人で行うことが出来ず、他人に頼らなければ先に進まない状態にいらだったりもしたが、途中からは現地のやり方にも慣れ、言葉も少しずつわかるようになって生活が楽しくなった。私が留学していた青海民族大学は、留学生に対して中国語とチベット語のクラスを開講していた。留学前はチベット語クラスに参加しようと考えていたが、現地の生活および調査に赴くにはどうしても中国語が必要であったため、急遽中国語クラスを取るようになった。チベットには多くの方言が存在する。大きくわけて、中央チベット、東チベット、東北チベットの 3 方言に区分されるが、その方言の中でも遊牧民の言葉があったり、村ごとに言葉が違っていたりする。私は留学以前から中央チベット語はある程度習得していたが、今回留学した東北チベットのアムド方言については全く知らなかった。それでも、チベット人の友人たちと話をするうちに、なんとなくアムド方言もわかるようになった。

留学して驚いたことは、チベット人の漢族化が、私が想像していたよりも進んでいるということであった。特に街にいる若者たち、そして男性よりも女性にその傾向が顕著であったように思う。また、チベット語が喋れても就職が出来ないという今の状況下で、チベット語を捨て、漢語だけを話すようになったチベット人たちがいることも驚きだった。都会の忙しい生活の中で、若者たちは少しずつ漢族に同化していつているようであった。一方で、田舎へいくとチベットの昔ながらの素朴な生活が残っていた。一つの暖炉を囲んで、家族、親戚、村人たちが団らんする風景。そこでは仏教や土地神への信仰が根強く残っており、都会の喧噪から離れた生活はゆったりと時間が過ぎていた。田舎には漢族の文化の影響がまだあまり入ってきていない一方で、人々の識字率も低く教育がまだまだ行き届いていないようであった。そんな中で、僧侶たちが中心となって、村の子どもたちに文字や仏教を教えているという取り組みも見られた。

私の留学中にもチベット人の焼身抗議が起こっていた。それらの情報は規制され、日本にいる時よりも情報が入らなかったが、それでも口伝いで人々に伝わっていた。ある時、チベット人の学生たちが焼身抗議に連動して、大学の中庭で灯明を炊いたことがあった。大学内に公安がやってきて、物々しい雰囲気だった。一方で漢族の学生たちは全くなにが起こっているのかわからない様子をしていて、それからわかるように、ほとんどの漢族はチベット問題に無関心のようなようであった。留学生がチベットの田舎を自由に旅行することは制限されており、道々に検問が設置されているような状態であった。私は政治を研究しているわけではないが、それでもチベット問題が今まさに続いていることが肌で感じられた。

そのような状況下ではあったが夏休みと冬休みにはチベットの田舎を回り、そこで生のチベットの文化に触れることが出来た。一般的にチベット人は親切で、会ったばかりでも、少し話しをして「日本から来た」と言うと歓迎してくれた。日本とは違う、人と人の距離の近さに、最初は戸惑いを感じながらも、最後はそれが心地よくなった。また調査で仏教寺院を訪れた時には、僧侶にお世話になった。僧侶の中には、中央チベットやインドなどへ仏教を学びに行ったことがある人もおり、言葉が通じて意思疎通ができるため、とても助かった。多くの僧侶とコネクションを作れたことは、これからの研究にとって大きな成果であった。

この二年間は私の人生において、とてもかけがえのない時間となった。これらの経験を活かし、これからも研究活動に邁進していきたい。また、チベット文化を守る取り組みを行ってきたい。



ラジャ寺院で行われた仮面舞踊の会場。3年に1度しか行われないとあって、近隣から多くのチベット人たちが集まっていた。



ラプラン寺院で行われた仮面舞踊の会場跡。現地の尼僧に調査中お世話になった。



カム地方の田舎で、仏教の授業に参加。チベット文字を読めない子どもたちのために、僧侶が授業を行っていた。